

スタッフルーム
Staff room

子どもたちと楽しむ絵本

おおかわ けいこ
大川 桂子

(信濃町メディアセンター)

ステイホームで暇を持て余していた頃、ビデオの録画映像を見ていた高校生の次女が、意外なものを見つけたというふうにつぶやいた。「お兄ちゃんとこんな仲いい時代、あったんだ…!」

それは、『おおきなかぶ』（ロシア民話）を当時小学1年生の兄が一生懸命読み聞かせ、隣にちょこんと座った3才の自分がじっと聴き入っている、なんとも微笑ましい姿だった。だが次女にしてみれば、小中学校時代は兄に何かと虐げられたので、負の記憶ですっかり上書きされ忘れてしまっていたらしい。掘り起こされた記録のおかげで、思いがけず兄の復権が叶うという、コロナ禍が我が家にもたらした小さなご利益だった。

今はそれぞれ社会人、大学生、高校生、中学生となった4人の子どもたちが小さかった頃は、毎晩寝る前に絵本を読んであげるのが私の習慣だった。子どもに読んでほしい本を選ばせると、お気に入りの同じ本を何日も続けて持ってくるので、読み手としては「またあ?」となることもしばしば。それが短いお話ならまだよいが、『おいしいのぼうけん』（古田足日・田畑精一作）のように80ページもあるとなかなか大変だ。「今日は別のにしてみない?」と提案を試みるも「これがいいの!」とあっさり断られ、自然に下がってくる臉と闘いながら読み聞かせたあの夜も、今となっては懐かしい。

昨今の小学校では保護者による読み聞かせボランティアは珍しくないが、わが子たちの学校でも、かなり以前に始まった読み聞かせの活動が、ゆるい形ながら連綿と続いていた。私も一時参加したが、これがとても楽しかった。授業前の「朝の読書タイム」を時々お借りし、当番の保護者が読み聞かせをする。12月には演出を工夫し、ピアノ講師をしている保護者が生伴奏をつける「クリスマススペシャル」を企画した。

小学校での読み聞かせの魅力は、一斉に絵本に注がれる子どもたちの瞳に触れる瞬間だ。特に1、2年生の子どもたちの眼差しときたら、

まっすぐで、きらきらと眩しく、たじろいでもまいそうだ。読み終わった後に聞かせてくれる感想も、純心でかわいらしいもの、鋭くて感心させられるもの、様々あっておもしろい。読み聞かせの日は、いつも新鮮で心豊かなひとときを過ごさせてもらった。

ひとつだけ困るのは、毎回の本選びである。高学年相手ともなると（本好きではない子にも楽しめるものは…）や（単純なお話だと幼稚って思われるかな）などと悩み始めて頭が痛い。一方で低学年には、楽しくて読んであげたくなる本が多く、探せば探すほどどれを選べばいいか分からなくなる。読み聞かせ当番の前には近所の図書館の絵本コーナーに入り浸り、迷いに迷う時間を過ごすのが恒例だった。

子どもを通じて絵本との関わりを持たせたおかげで、大人になってからも素敵な絵本にめぐり会えたのは幸運だった。その中でも忘れられない一冊は、『ルリユールおじさん』（いせひでこ作）だ。舞台はパリの路地裏、植物大好き少女のソフィーが、読み込んで綴じ目のほどけた植物図鑑を直してもらおうと、ルリユール（製本職人）のおじさんを探し訪ねるところから始まる。本を愛おしむふたりの心が、しだいに触れあい共鳴していく様が、淡い色遣いの水彩画で静かに描かれている。おじさんの手によって修復され、大好きなアカシアの絵が表紙となった愛用の図鑑を、小さなソフィーが「わたしだけの本。」と抱きしめるシーンは、何度読んでも胸がいっぱいになってしまうのだ。

さて、幼い頃絵本が好きだった子は必ずしもそのまま本好きになるというわけでもないらしい。我が家の中高生の2人はスマホばかり見ていて、本を開く気配が全くない。小さい頃はあんなに絵本が好きだったのになあ…と嘆くばかりだ。でも、いつかこの子たちも親になることがあるのなら、毎晩絵本を読んであげたりするのかな…、そんな淡い期待を密かに抱いている。